

LC いぽーと

47

2021年3月

〒663-8558 西宮市池開町 6-46  
武庫川女子大学 言語文化研究所  
ilc@mukogawa-u.ac.jp  
Tel : 0798-45-3536  
Fax : 0798-45-3574

関西

## SNS と 方 言

## ——大学生の方言使用実態とその意識——

前号では、新型コロナウイルスによって大学生の LINE 使用が変化した実態を報告しました。たとえば、久しく連絡を取っていなかった人と連絡を取り合うようになったり、返信までの時間が短縮されたり、やり取りの回数が増えたりするなど、LINE を利用する相手や時間がコロナ前に比べて増えたというものでした。新型コロナウイルスの発生によって、対面コミュニケーションが制限される中、LINE をはじめとする大学生の SNS によるやり取りは増加する傾向にあることは確かだと言えるでしょう。

これら SNS で用いられる言葉は基本的に書き言葉ではありますが、話し言葉的な文体が多く用いられます。特に、友人とのやり取りなど私的な場面では、その傾向が強いと想像されます。そして、話し言葉的な文体では方言が使われやすくなります。今号は、やり取りの中の「方言」に焦点を当ててレポートをお届けします。大学生は SNS におけるコミュニケーションで、方言を「意識的に使うこと」、また、「意識的に使わないこと」があるのか、ないのか、それはどのような場面なのか、そして、その理由は何なのかについてまとめました。

## 1. 調査概要

・調査対象者：「SNS から日本語を見る」<sup>1</sup>2020 年度前期受講者（102 人）有効回答数 99。

受講者の母方言：関西方言 88 人、関西方言以外 11 人。

・調査方法：グーグルフォームに設問を投稿し、受講者が回答を入力する。

・設問内容：A・B について自由記述とし、収集したデータから情報を抽出した。

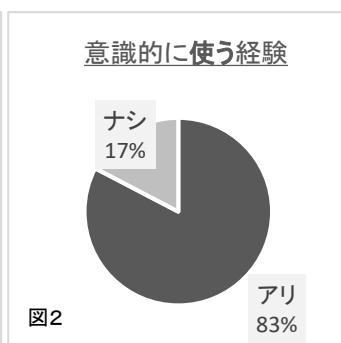
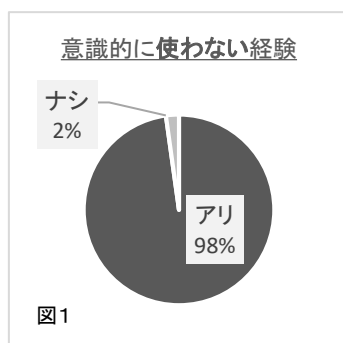
A：SNS を利用する際に意識的に方言を「使う」ことがありますか。あるとすればどのような状況ですか。その相手や理由なども入力してください。

B：SNS を利用する際に意識的に方言を「使わない」ことがありますか。あるとすればどのような状況ですか。その相手や理由なども入力してください。

<sup>1</sup> 本学の共通教育科目。2020 年度前期は Google Meet による遠隔授業で行った。

## 2. 調査結果

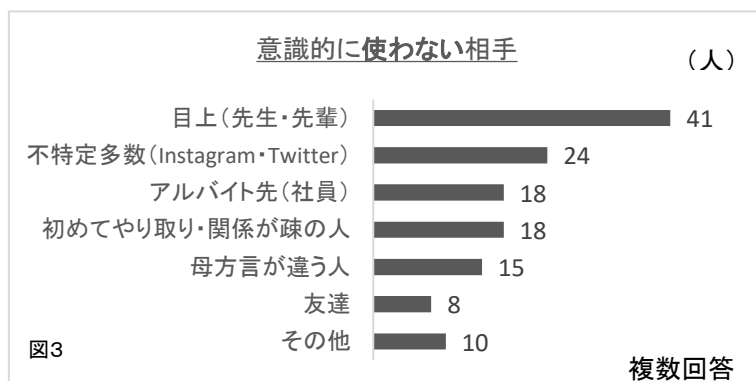
### 2.1 方言の意識的な使用の有無と相手



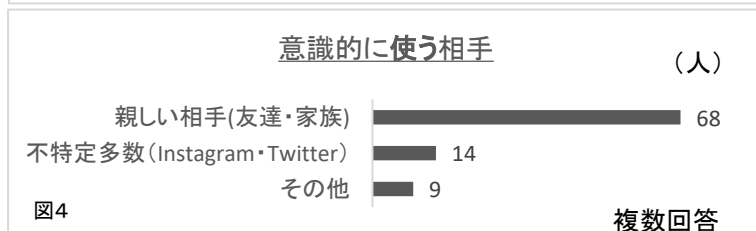
SNSの利用時に「意識的に方言を使わない経験がある」のはほぼ全員で、「意識的に方言を使う経験がある」のは約8割である。一般的に、方言は、近しい間柄のコミュニティで、無意識のうちにごく自然に使われる日常の言葉と捉えられている。そうした性格

から、目上の人に対してやフォーマルな場面などには控えるのがよいとされている。

この考え方からすれば、「意識的に使わない」回答が多いことは当然の結果と言える。他方、方言を「意識的に使う」とする回答は、あってもそれほど多くないと予想されるはずのものだ。ところが、「意識的に使う経験アリ」は8割を超えている。わざと方言を使うことがあるというのだ。これは不思議な現象である。この「意識的に方言を使う」とはどういうことだろうか。以下では、特にこの点に注目しながら考えよう。



まずは、「相手」である。「意識的に使わない」回答では、「目上である先生や先輩」、「アルバイト先」など、改まった言葉遣いが必要とされる相手に対するものが多い。これらは、先に述べたように、方言の一般的な使用に沿ったものである。



一方、「意識的に使う」相手は、「友達・家族」がほとんどである。親しい間柄の相手に対して意識的に方言を使っ

ている。Instagramやツイッターへの投稿も、相手は不特定多数のはずであるが、実際には友人、知人だけに公開している場合もありそうだ。大学生にとってのSNS利用は、きわめて日常的な行動である。そして、相手が親しい間柄ともなれば、方言を使うのは「無意識」に行われるのが自然だ。それなのに、半数以上が方言を「意識的」に使うと答えている。

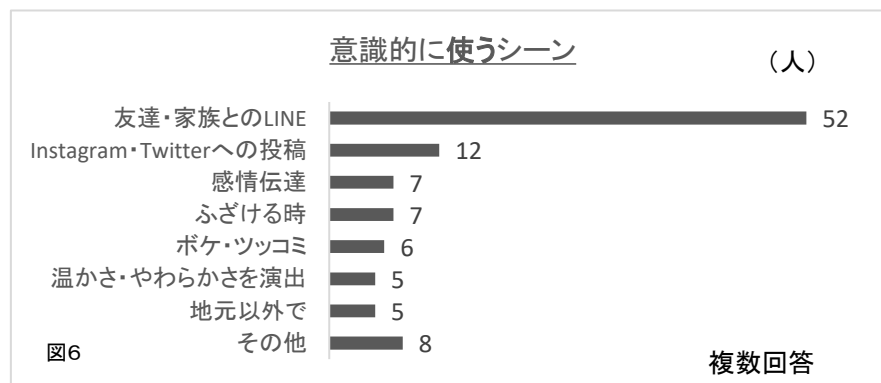
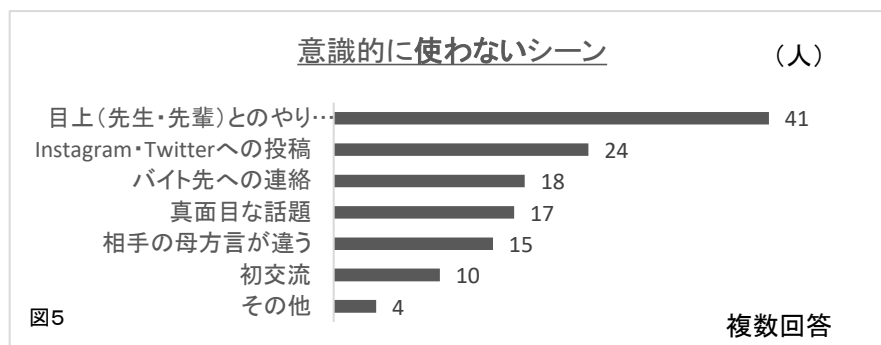
この理由として考えられることの一つは、近年の若年層の人たち、特に関西の若者にとって、方言は、近しい間柄のコミュニティで無意識のうちに使われる日常の言葉では、もはや

なくなったというものである。全国一律的な学校教育や多種類のメディアになじんだ人たちが日常に使う言葉は、標準語に方言が部分的に交じっているはずだが、本人の意識としては標準語に近いのではないか。そして、方言とは、その地域の特徴的な形態をもった語句、関西で言うところのコテコテの言葉だと認識しているように思われる。

方言イコール地域の特徴的な形態の語句という認識は、SNS が形式的には書き言葉であることとも関係する。書き言葉では、アクセントやイントネーションの表示は難しい。その点、特徴的な語句は示しやすい。「違うよ」を関西弁として示すのは難しいが、「チャウねん」なら、方言であることを簡単に示すことができる。

SNS の世界の学生たちは、方言と標準語とを使い分けるバイリンガルではなく、標準語ベースの言語と特徴的な方言とを使い分けるバイリンガルだと言えよう。

## 2.2 方言の意識的な使用の有無とシーン



次は「シーン」である。多かったものを見ると、「使わない」場合は「目上とのやり取り」「InstagramやTwitterへの投稿」「バイト先への連絡」「真面目な話題」など、改まったシーンである。これらはすでに述べたように、方言のごく自然な使い方

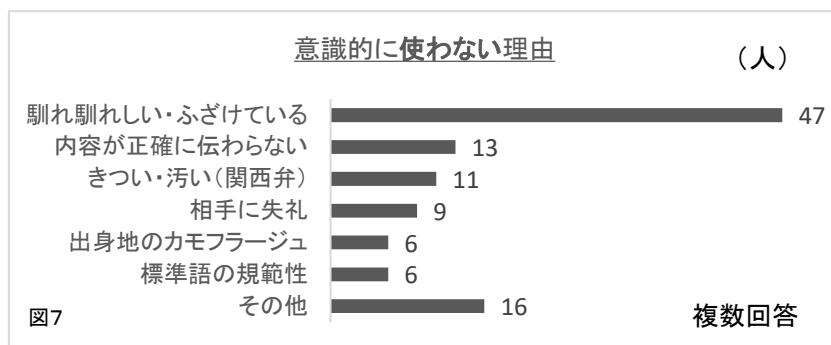
ある。

他方、「使う」場合、3、4 位に「感情伝達」「ふざける時」が入っている。用件を伝えるためではなく、「自分の気持ち」を表現し伝達するために方言を使用していると推察される。これは、相手が親しい場合、標準語ベースの言葉では、通りいっぺんの気持ちとしてしか表せないが、方言らしい方言なら、心からの言葉として伝わると考えるからではないか。

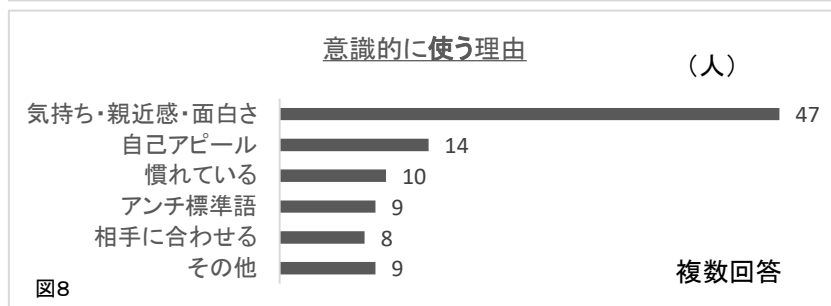
また、その次の「ボケ、ツッコミ」「温かさ・やわらかさを演出」というのも、伝える内容に情緒的な要素を加えるものと言えよう。これらのシーンでの使用は、方言が表現、伝達に特別な効果を発揮することを理解した上での意識的な行為と考えることができる。たと

例えば、関西方言の「なんでやねん」はツッコミの定番とされるが、タイミングが合ってこそ、その効果は発揮される。タイミングよく行うためには、標準語ベースの言葉から特徴的な方言へ「意識的に」切り替える必要があるのだ。

## 2.3 方言を意識的に使う理由・使わない理由



「使わない」理由には、やはり規範意識とかかわるものが多い。シリアスな場面では方言を避けた方がよいと考える学生の多さがうかがえる。



他方「使う」理由で最も多いものに「気持ち」や「面白さ」がある。感情伝達に方言の効果があることを認識していることを示している。

「使う」理由で、関西方言話者に特有なのは、「自己アピール」と「アンチ標準語」であろう。関西方言は、他の地域方言に比べて『強い』と言われる。それは他者からの評価であると同時に、関西方言話者自身が関西方言に抱いているイメージでもある。あえて関西方言を使うことで、何らかの良い反応が得られる可能性を知っているのだ。標準語には「他人行儀で冷たい感じがする」、「使うと気持ち悪い」と言われた経験を持つ者が少なくない。標準語を使いたくないことが方言を使う理由となり得るのである。

今の大学生にとって、方言とは日常身近な世界で無意識に使用するものではない。たとえ、方言を標準語に交えて使っていても、そこに方言が存在するという意識はない。方言は、感情や気分を相手に直感的に伝えるときに役立つもので、ここぞというときに共感を呼び起こせるソウルフードのようなものである。だから、親しい相手に、想いを込めた内容を強く伝えたいとき、論理を超えて感覚的に説得したいときに、意識して方言を利用するのである。そして、関西では、方言の強みを認識してその効力を信じているために、より意識的な使用が多くなっていると思われる。

作成にあたり佐竹秀雄先生からご助言をいただきました。記して感謝いたします。

担当：岸本 千秋      作業協力者：向井 弥生